

『釋淨土群疑論』に説かれる第一義諦俗諦二諦説

村上真瑞

以前、拙論『釋淨土群疑論の研究』⁽¹⁾において、『大乘苑義林章』において、善導の指方立相に対する批判が展開されていることに注目して、『釋淨土群疑論』における淨土の三界撰・不撰論を展開した。今回は、『釋淨土群疑論』巻第一に於いて、淨土の第一義諦俗諦二諦説を展開して、再度、指方立相に対する批判を反駁しているので、その論理の思想背景を探ってみよう。『大乘法苑義林章』の主張を再考してみよう。

玄奘が印度から帰り法相唯識が盛んに学ばれ、玄奘の高弟慈恩大師窺基（A. D六三二―六八二）は、『大乘法苑義林章』巻第七佛土章において法相唯識の立場から淨土の三界撰・不撰を論じている。懐感の生没年代は前述の論のように西暦七世紀後半（A. D七〇〇没、金子説ではA. D六九九没）であるから『釋淨土群疑論』が懐惲によって編纂されたのは西暦八世紀初頭と考えられる。しかも窺基も懐感も活躍した場所は同じ長安である。したがって法相唯識の立場から種々の問題を主体的に論じている、窺基の著、『大乘法苑義林章』を懐感が読み、多くの影響を受けた可能性は極めて高い。『往生西方淨土瑞應傳』においても「感法師居長安千福寺。博通經典⁽²⁾」と記されるように、博く經典に通じていた懐感であるから、同時代、同地域の著名な学者である窺基のものを読まないはずがない。そこで窺基の『大乘法苑義林章』巻第七末、佛土章に注目してみよう。すなわち、

第六處所_ト者其法性_ノ土_ハ、即眞如_ノ理_ハ、無_レ別_ノ處所_一。自受用_ノ土_ハ、亦充_ミテ_ニ法界_ニ、更_ニ無_レ別_ノ處_一。佗受用_ノ土_ハ、佛地經_ニ言_フ。超_レ過_ト、三界所_レ行_ノ之_レ處_ヲ。彼論_ニ釋_ソ言_ク。非_ニ三界_ノ愛_ノ所_ニ執_受スル_一故_ニ。離_ニ相應_ト所_レ緣_ト、縛隨_増スル_ヲ言_フ。超_レ過_ト三界_ト。故_ニ是_レ道諦_ノ善性_ノ所_レ攝_ハ。彼_ニ有_ニ三_ノ釋_一。有_ニ義_ハ、各_レ有_ニ處_ニ、說_レ在_ト、淨居天上_ニ、有_ニ處_ニ、說_レ在_ト、西方等_ニ。故_ニ有_ニ義_ハ、同_レ處_一。淨土_ノ周圓_ノ無_レ有_ニ二_ノ邊際_一。遍_ニ法界_ニ。故_ニ。如_レ實_ノ義_ハ、者_レ自_レ受_レ用_ノ土_ハ、周_ニ遍_ニ法界_ニ。無_レ處_ト不_レ有_ト。不_レ可_レ說_テ言_フ。離_ニ三界_ノ處_ト、即_ニ三界_ノ處_ト。若_シ佗_レ受_レ用_ノ土_ハ、或_ハ在_ニ色界_ノ淨居天上_ニ、或_ハ西方等_ノ處_所不_レ定_ト。法華_ニ亦_レ言_フ。衆生見_ニ劫盡_ト大火_ニ所_レ燒_ト時_ハ、我_レ此_レ土_ハ、安穩_ト、天人常_ニ充_レ滿_ト。十地_ノ所_レ見_ノ乃_チ是_レ報土_、地前_ノ所_レ見_ノ乃_チ是_レ化土_、隨_レ宜_ニ而_レ現_ス。何_レ得_レ定_ト、方_レ別_レ指_テ一_ノ處_ヲ。欲_ソ令_ニ三_ノ衆生_ノ起_ニ勝_ヲ欣_心、一_レ別_レ指_テ二_ノ處_所。隨_ニ心_ノ淨_レ處_ニ、即_ニ淨土_ノ處_ト。化土_ハ、必_ズ隨_テ三_ノ界_ノ處_所、任_レ物_ニ化_{スル}。生_レ即_レ現_ル。故_ニ。古_レ人_於テ_レ此_ニ種_レ種_ニ分_レ別_ト。三_ノ界_ノ外_ニ別_ニ有_ニ二_ノ處_所、以_レ爲_ニ淨土_ト。理_レ必_ズ不_レ爾_ヲ。所_レ化_ハ、必_ズ有_ニ異_ノ熟_ノ識_在。異_ノ熟_ノ識_在、必_ズ是_レ三_ノ界_ノ攝_ハ。何_レ得_レ出_レ界_ヲ。土_ハ、非_ニ界_ノ繫_ニ、言_レ超_ト三_ノ界_ト。非_ニ處_在、別_レ隨_ガ、所_レ化_ニ。故_ニ。(3)

と説かれるように、法性土は眞如の理であり、自受用土は法界に充ちているから、特に決められた場所はないのであるが、他受用身については、『佛地經』において、三界に形成された場所を超えたものである、と説かれる箇所を引用してそれを三方面から解釈するが、その中、「如実の義」として、次の解釈を示している。『法華經』において衆生は、世界の住劫（存続の時期）が尽きて、大火に焼き尽くされる時、今まで自分の住んでいた娑婆世界を、安穩であり天人が満ちていると感じると同じように、十地の菩薩が見れば報土となり、地前の菩薩が見れば化土となる。それぞれの心に随ってそれぞれの心に淨土が現れるのであるから、どうして、方向を定めて、一つの場所を特別に定めることができるか。として、まさに善導の指方立相に対する論難がなされている。そして、そのような指方立相は、衆生に淨土へのおくれたあこがれの心を起こさせるために、特別に定めただけのことであって、本来は、心の淨らかな様子によって、

それぞれの浄土の浄らかなるのである。だから凡夫の変現するような化土は、三界の迷いの世界の物に心を至して変現するのであるから三界撰以外の何ものでもない。それなのに古人は、この三界撰の浄土に理屈をつけて、三界の外に特別にある場所だと述べている。しかし、本当の道理は決してそうではない。凡夫によって変現された浄土には、必ず清浄智に転じられていない異熟識（阿頼耶識）がある。異熟識が残っている心は、三界の撰に他ならない。どうして三界を出過しているといえよう。三界のあらゆる煩惱から解放されてこそ三界を超えたといえるのである。だから、指方立相のように、浄土という場所が特別にあるのではない。変現された心に随って浄土はあらわれるのである。と示されるように、窺基は、厳しく浄土教の指方立相に対して論難を加えている。

このような窺基の主張に対して懐感は、『釋浄土群疑論』巻第一に於いて第一義諦俗諦二諦説を展開して反論を展開している。論を引用して和訳解説をしてみよう。

【本文】寶永版一卷二十四帖—二十五帖

問曰如大品經等說内空外空内外空等今浄土即是外空衆生即是内空既爾有何衆生爲能生有何浄土爲所生又維摩經言諸佛國土亦復皆空又問以何爲空

【現代語訳】

問ていう。大品經等に内的な法である六根が実体が無いとされ、外的な法である六境が実体が無いとされ、内的な法である六根と外的な六境がともに実体が無い等と説明されている。今（大品經の説に当てはめるならば）浄土はとりもなおさず外的な六境が空であり、衆生はとりもなおさず内的な法である六根が空である。既にそうであるならば、どのような衆生があつて生ずる性質のあるものとし、どのような浄土があつて生ぜられるところとするのであろうか。又維摩經には諸佛の國土もまた、すべて実体が無いとされる。又問う。どのような理由で実体が無いというのか。

【解説】

空の思想にもとづき浄土のあり方を問う。

【本文】寶永版一卷二十五帖

答曰以空空等又言菩薩云何觀於衆生維摩詰言如第五大第六陰第七情十三入十九界等法法花経言諸法從本來常自寂滅相般若經言如來說莊嚴佛土者即非莊嚴又言實无衆生得滅度者

【現代語訳】

答ていう。因縁によつて生じたのであるから、実体としての自我はないという理由で空である等と。又言う。菩薩はどのようにして生きとし生けるものを観ずるのか。維摩詰は次のように言う。四大（地・水・火・風）以外の第五の元素（本来無し）、五蘊（色受想行識）以外の第六の構成要素（本来無し）、六根（眼耳鼻舌身意）以外の第七の認識機官（本来無し）、十二処（眼耳鼻舌身意色声香味触法）以外の第十三の対象認識の手がかり（本来無し）、十八界（六根（眼・耳・鼻・舌・身・意の六つの知覚器官）と六境（色・聲・香・味・触・法の対象の世界）と六識（眼・耳・鼻・舌・身・意の認識作用。））以外の第十九の界（本来無し）等の存在のようなものである。『妙法蓮華經』方便品第二に言うこの世に存在するものはすべて最初から寂靜に歸して、一切の相を離れていると。『金剛般若波羅蜜經』⁹に言う如來が説かれた。佛の国土を嚴かに飾るとはとりもなおさず嚴かに飾ることが非存在であるということであると。又『金剛般若波羅蜜經』に言う（数限りない衆生の煩惱を滅してさとりの世界へ渡すということとは）本来は衆生の煩惱を滅してさとりの世界へ渡すことができた者が非存在であるということである。

【解説】

『般若経』等に説かれる空の思想を基にした、因縁仮和合であるがゆえに不変の存在を否定する第一義諦の立場を説明

している。

【本文】寶永版一卷二十五帖

如是等諸大乘經究竟了教咸言諸法空寂何因今日說有西方淨土爲所生之士衆生爲能生之人勸人著相起行依不了義經此乃不得諸佛深義取著有相不名習學大乘法也

【現代語訳】

すでに示したような諸大乘經の究極の完全な教えの中にすべて諸々の存在は実体性がなく空無であると言っている。どのような理由で今日西方に極樂淨土があると説いて生ぜしめられるところの国土とし、生きとし生けるものを生まれていくことが出来る人として、人に極樂往生を勧めて外に現われている姿に執著して修行をなして不完全な經典に帰依させるのであろうか。このことはいうならば、諸佛の深い道理を理解せず、現象のすがたに執着している。これは大乘仏教の教義を学習していると言いうことはできない。

【解説】

第一義諦の究極の空思想に立脚するならば、淨土教は現象の姿に執着する不完全な教えではないのか。

【本文】寶永版一卷二十五～二十六帖

釋曰如向所說大乘空義究竟了教深生敬信不敢誹謗究竟出離二種生死斷人法執證大涅槃唯此一門更无二路小行菩薩二乘凡夫修菩薩行欲求佛果未證无生法忍不免退轉輪廻非无種種法門句義依之修學修求出世如何所引諸大乘經說畢竟空破人法相唯此等教是真佛說

【現代語訳】

解釈している。先に説くところのような大乘仏教に説かれる存在するものは、すべて因縁によって生じたのであるから、

実体としての自我も固定的実体もないという道理は究極の完全な教えである。深く敬い信ずる心が起る。しいてそれることはしない。極め尽くして迷いの世界にさまよう凡夫が受ける生死と迷いの世界を離れ、輪廻を超えた聖者が受ける生死をも離れ出でて、常一主宰のアートマンが存在すると執着する我執（人執）と、もろもろのダルマ（Dharma 事物）に実態があると執着する法執を断ち切り、大いなる最高の理想の境地を悟ることは、ただこの大乘の一門のみでありそのほかに別の道は無い。十分に行が足りていない菩薩、聲聞縁覚などの自己中心的であり、利他の行を忘れたもの、愚かな一般の人たちが、わが身を捨てて一切衆生の抜苦与樂しようとする菩薩の行なう修行を修して、仏という究極の結果を求めようと願って、まだ不生不滅の理に徹底したさとりを身をもつて実現することができず、修行によって到達した境地を失つてもとの下位の境地へ転落して迷いの世界に生まれかわり死にかわりして、車輪のめぐるとどまることがない輪廻を逃れることができないということに対しては種種の教えや名称がないということはない、いやかならずある。この教えによつて佛道を修して学び俗世間を離れた佛道の世界を修行し求める。どうして先に引用したような諸の大乘經典に究極的に存在するものには、自体・実体・我などというものはないと説いて、人間の自己の中の実体として自我と存在するものの実体としての自我のすがたを否定するだけであろうか。ただこれら的大乗教だけが眞の佛説ということができようか、いやできない。

【解説】

究極の第一義諦のみが佛説であろうか。と疑問を投げかける。

【本文】 寶永版一卷二十六帖

今觀經等所說西方淨佛國土勸諸衆生往生其國此亦是於眞佛言教既俱佛說並爲眞語何爲將彼空經難斯淨教信彼謗此豈成理也然佛說法不離二諦一俗諦二第一義諦俗諦是因緣生法依他起性非有似有第一義諦是无相眞法圓成實性諸聖內證妙有眞有

然其二諦非一非異以眞統俗无俗不眞即一切諸法皆歸寂滅若不以眞攝俗即一切諸法縁會故有縁離故无万法宛然不可言无也

【現代語訳】

今『觀無量壽經』⁽¹⁰⁾等に説くところの、西方の極樂浄土に諸の衆生よ、その極樂浄土に往き生まれなさいと勧めること、これもまた眞実の仏の言語によつて示された教えである。すでに（前述の大乗教と）ともに佛説であり、どちらも仏の眞実のことばである。どのようにして前述の空を説くあの大乘教をとつて、この浄土教の非を責めることができようか。いやできない。あの大乘教を信じ、この浄土教をそしるならばどうして道理を完成することができようか。いやできない。しかし佛の説法は二つの眞理を離れることはない。一には世俗の立場での眞理であり、二にはすぐれたさとの智慧を極めた境地である。世俗の立場での眞理は、本来実有のものでなくみな因と縁とで結び合わされて、仮に生じているの存在であり、因縁和合によつて生じ、因縁が無くなれば滅するものである。存在しないものであつて、かつ存在に似ている。究極の眞理は形や姿を持たない眞理であり、ありとあらゆるものの眞実の本性である。諸の無漏の智慧を起こした聖者の内面的なさとり、絶対の有であり眞実の有である。しかしその（眞・俗）二つの眞理は一つでもなく異なつてもいない。究極の眞理によつて世俗の眞理をひとすじにまとめると、世俗の眞理として究極の眞理でないものはない。とりもなおさずすべての諸の存在は皆な寂靜に歸して、一切の相を離れる。仮に究極の眞理によつて世俗の眞理を納めることができなければ、とりもなおさずすべての諸の存在は、あらゆる条件が出会うが故に存在するし、あらゆる条件が離れるが故に存在することができなくなるのである。すべて存在がちょうどそのままである。何もないと言つてはならない。

【解説】

因縁仮和合の世俗の立場の眞理を認めなければ、世間の現象界が成り立たない。第一義諦と世俗諦との関係は不一不異

のものである。

【本文】寶永版一卷二十六帖

佛或破衆生相令歸无相欲除人法二執見修兩惑偏明第一義諦說一切皆空欲令衆生捨凡成聖斷惡修善欲求淨土厭離穢土具說種種法門因果差別凡聖兩位淨穢二土

【現代語訳】

佛、あるときは人びとの姿を壊して、定まった姿のないものに帰着させる。常一主宰のオートマンが存在すると執着する我執（人執）と、もろもろの事物に実態があると執着する法執、思想的、観念的な迷いと生まれながらに具わっている本能的な煩惱の迷いととの二つの迷いを取り除こうと願って、水準を越えて一方的に最高の真理を明らかにしてあらゆる現象や存在が因縁によって生じたのであるから、実体としての自我はないであると説き、人びとに対して、ある時には愚かさを捨てて聖者と成り、悪いおこないを断ち切って善いおこないを修め、佛・菩薩の清浄な国土を願い求めて凡夫の住むけがれた国土を厭い離れさせようと願って、具体的にさまざまな仏の教え、原因があれば必ず結果があり、結果があれば必ず原因があるというの区別、凡夫と聖人というふたつの位、淨土と穢土との二つの国土を説いた。

【解説】

佛は、人法二執、見惑修惑を除かんが為に第一義諦一切皆空を説き、凡夫衆生をすべて引接したいときは、差別的な種々の俗諦を説いた。

【本文】寶永版一卷二十六帖～二十七帖

今遣捨穢歸淨隔凡成聖即於此門中說種種諸法皆爲成就佛法利益衆生化宜方便逗機善巧理宜如此故教有二門也不可讀第一義諦之經畢竟无相之理即謂淨土因果等教將非是佛眞言不爲究竟之說便謗而不信也

【現代語訳】

今けがれを捨ててきよきに帰入し愚かさを間をしきりへだててけがれなき人と成らせようとして、とりもなおさずこの法門の中において様々な教えを説かれた。すべては佛の教説を達成し生きとし生けるものに恵みを与えようとしての、飯の適当なでだてであり、それぞれの教えが相手の素質に合致して、応分の益を与えるたくみなる手だてである。理論として当然このようにすべきである。だから教には二つの門がある。(一つは)すぐれたさとり智慧を極めた境地を説く経である。究極の形や姿のない寂滅涅槃の理論のみを読んで、とりもなおさず浄土の因果関係を明らかにするなどの教は、当然佛の眞実のことばではないと言って、究極の説としないで、とりもなおさず、軽視して信じないということをしてはならない。

【解説】

第一義諦のみを信じて、浄土の因果関係を明らかにするなどの教は、佛の眞実のことばではないと言って、軽視して信じないということをしてはならない。

【本文】寶永版一卷二十七帖

不可讀種種因果差別言教不信説一切空寂甚深般若波羅蜜多无相玄宗便毀而不持也

【現代語訳】

(もうひとつは)様々な、ある原因に対して異なつた結果が生ずるといふ、如来が言語によつて示した教えのみを読んで、すべての事物は実体性がなく、空無であると説く極めて奥深い卓越した知性の至高の境地における、物事には固定的・実体的な姿という物はないといふ深遠な道理を信ぜず、すぐさまそしつて受け入れられないようなことをしてはならない。

【解説】

逆に世俗の差別諦である浄土の因果關係を明らかにするのみを信じて、第一義諦の空の思想を輕視して信じないということをしてはならない。

【本文】寶永版一卷二十七帖

此即於諸大乘經三藏聖教有讚有毀懷疑懷信亦修善法亦造重罪信不具足名一闡提如十輪經具明其罪可須俱生敬信善會二宗旨趣也

【現代語訳】

以上のことはとりもなおさず、様々な大乘の教法を説く經典、經・律・論三藏の佛の教えにおいて、誉め讃えることあり、また悪口をいうことあり、あるいは疑いを心にいだき、あるいは信を心にいだき、またある時は、道理にしたがい自他を益する法を修しまたある時は、重い罪を造つて信仰心が満ち備わることがない者をどんなに修行しても絶対にさとするのできない者とする。十輪經^[1]に具体的にその罪を明らかに示しているものに匹敵する。是非とも両者とも互いに敬い信ずる心を起こしてよく第一義諦と因果差別の二つの宗の考え方を統合すべきである。

【解説】

両者とも互いに敬い信ずる心を起こしてよく第一義諦と因果差別の二つの宗の考え方を統合すべきである。

【本文】寶永版一卷二十七帖

故維摩經言能善分別諸法相於第一義而不動能善分別諸法相者此依世諦門說也於第一義而不動者此依第一義諦門說也

【現代語訳】

この様な理由で『維摩經』^[2]に言う、しっかりと巧みにすべて存在の特徴を区別して考えることによって、すぐれたさとり

の智慧を極めた境地において動くことがないと、しっかりと巧みにすべて存在の特徴を区別して考えるとは、これは究極のものを覆っている立場での真理に依って説いているのである。すぐれたさとの智慧を極めた境地において動くことがないとは、これは究極の真理に依って説いているのである。

【解説】

『維摩經』に説く、「すべて存在の特徴を区別して考える」と言う世俗の分別は「すぐれたさとの智慧を極めた境地において動くことがない」という第一義諦に基づいているのである。

【本文】寶永版一卷二十七帖

又言諸法不有亦不无以因縁故諸法生不有不无者第一義諦離有離无等四句也諸法生者世諦從因縁等世間出世間種種諸法生也

【現代語訳】

また『維摩經』¹³に言う。諸々の存在は実際にあるのでもなく、実際ないのでもない。すべての現象は単独で存在するものではなく、必ずいろいろな原因や条件によって成立するという理由によって諸々の存在は生起する。有無などの相対的な対立を超越した境地はすぐれたさとの智慧を極めた境地である。有を離れ无を離れる等の存在に関する四種の分類法である。諸々の存在が生ずるとは、究極のものを覆っている立場での真理である。結果を招くべき直接の原因と因を助けて結果を生ぜしめる間接の原因としたがって、うつり流れてとどまらない現象世界や世俗を離れた清らかな世界の諸々の存在が生ずるのである。

【解説】

『維摩經』に説く、「諸々の存在は実際にあるのでもなく、実際ないのでもない。すべての現象は単独で存在するものは

なく、必ずいろいろな原因や条件によって成立する」というのは、まさに第一義諦と世俗諦とは互いに支え合つて現象は成り立つのである。

【本文】寶永版一卷二十七帖～二十八帖

又言雖觀諸佛國永寂皆空而不畢竟墮於寂滅是菩薩行雖成就一切諸法而離諸法相成就一切諸法者世諦法也而離諸法相者第一義諦无相也

【現代語訳】

又『維摩經』⁽¹⁴⁾に言う。たとえ、諸佛の国は絶対の寂滅であつてあらゆるものは空無であると法の本質を分別照見したとしても、それであつても結局のところは心の究極の静けさに陥ることはないこと、これこそ菩薩の行である。たとえあらゆる佛の教法を達成したとしても、しかもあらゆる存在のすがたを離れていると、あらゆる佛の教法を達成するとは世俗的立場での真理の教えである。あらゆる存在のすがたを離れるとは、すぐれたさとの智慧を極めた境地であつて、形や姿はないのである。

【解説】

『維摩經』に説く「あらゆる佛の教法を達成する世俗的真理のと、あらゆるすがたを離れ、智慧を極めた境地」がともに矛盾せずに成立しているところに菩薩行がある。

【本文】寶永版一卷二十八帖

又言雖知諸佛國及與衆生空而常修淨土教化於羣生上兩句第一義諦下兩句世諦大品經等說内外空等第一義諦也而言淨佛國土教化衆生世諦也

【現代語訳】

又『維摩經』⁽¹⁵⁾に言う。たとえ諸佛の国土及びそこに住する生きとし生けるものは、因縁によって生じたものであって、固定的実体がないと知るとしても、しかしながら常に淨土に往生するための行を修行して人びとを教え導くと。最初の二句はすぐれたさとり智慧を極めた境地である。後の二句は世俗的立場での真理である。『大品般若經』等に、内の六根外の六境を觀すると、両者がともに空である等と説くのはすぐれたさとり智慧を極めた境地である。しかし佛の國土を淨めて人びとを教え導くと説くのは世俗的立場での真理である。

【解説】

『維摩經』に説く「諸佛の國及び衆生と空である」という第一義諦と「常に淨土に往生するための行を修行して人びとを教え導く」という世俗諦とが一体である。

【本文】寶永版一卷二十八帖

如是等衆多大乘言教皆說畢竟空寂法門即言淨佛國土教化衆生子須具讀經文上下參綜自相和會除其信謗之心爲人宣說勿有讚毀之語

【現代語訳】

このように多くの大乘經典の如來が言語によって示した教えには皆な究極的に一切の事物は実体性がなく空無であるという真理の教えを説きながら、とりもなおさず佛の國土を淨めて人びとを教え導くと説く。あなたは、是非とも欠けめなく經の文を読んで上から下までよく考え、何本ものすじをまとめ、自ら互いに經論の略義を調和して、その信用したりそしたりする心を除いて、人のために教えを説き述べ伝えるべきである。あるものを誉め讚えあるものをそする言葉があつてはならない。

【本文】寶永版一卷二十八帖

此即自利利他同得離苦解脫而乃披尋聖教文義不同自信不具毀陷其身令他聽徒成闡提業自損損他也

【現代語訳】

これはとりもなおさず、自らは悟りを求める行為も、人々に対しては救済し利益を与える行為も同じように苦難を離れ完全な精神的自由を得ることができ。それなのに經典を教説を問ひ求めたところ文章の表現と内容とが同じでないという理由によって、自らは信心が欠けていて自分の身を破りおとしめ、他の聞くともがらに對して善根を断じていて救われる見込みのない者の行いをなさしめることになるので、自らそこない他人をもそこなうのである。

【解説】

第一義諦と世俗諦の調和こそが大乗菩薩道にとって大切であると説く。

【考察】

上記の『釋淨土群疑論』の第一義諦と世俗諦との調和を述べるその背景について曇鸞の『無量壽經論註』に説かれる法性法身、方便法身に着眼して考察してみたい。

【本文】

入第一義諦者彼無量寿仏国土莊嚴第一義諦妙境界相十六句及一句次第説応知第一義諦者仏因縁法也此諦是境義是故莊嚴等十六句称為妙境界相此義至入一法句文当更解釈⁽¹⁶⁾

【現代語訳】

入第一義諦（さどりの智慧を極めた境地に入る）とは、彼の無量寿仏の国土の嚴かに飾られた模様は、さどりの智慧を極めた境地（清淨功德）の見事な美しい対象であるということである。十六の意味を表しうる文章と及び（究極の）一つの意味を表しうる文章と順序をもって説く。当然知るべきである。ここでいう第一義諦とは仏の説く縁起の理法であ

る。ここでいう諦とは対象の意味である。このような訳で厳かに飾られた模様等の十六の意味を表しうる文章を称して見事な美しい対象の形とする。この道理は、入一法句（の文の説明）に至って当然更に解釈するであろう。

【解説】

無量寿仏の国土の莊嚴に於いて、第一義諦という姿をもたない真理と、妙境界相という姿を有した相反する二面から取り上げている。

『無量壽經論註』卷下

【本文】

略説入一法句故上国土莊嚴十七句如来莊嚴八句菩薩莊嚴四句為広入一法句為略何故示現広略相入諸仏菩薩有二種法身一者法性法身二者方便法身由法性法身生方便法身由方便法身出法性法身此二法身異而不可分一而不可同是故広略相入統以法名菩薩若不知広略相入則不能自利利他⁽¹⁾

【現代語訳】

略して説くならば真理を表す章句に入るからである。上の国土の厳かに飾られた模様を説く十七の意味を表しうる文章と如来の厳かに飾られた模様を説く八の意味を表しうる文章と菩薩の厳かに飾られた模様を説く四の意味を表しうる文章とを広とする。真理を表す章句に入るを略とする。どのような理由で広略互いに入ることを示し現わすのか。諸仏菩薩には二種の法身がある。一には真如を体とする無色無形の法身、二には衆生を利益する仏の身である。真如を体とする無色無形の法身に基ついて衆生を利益する仏の身を生ずる。また、衆生を利益する仏の身に基ついて真如を体とする無色無形の法身を出現する。この二つの仏の身体は異なれども分けることはできない。一つであるけれども同じとすることはできない。このような訳で広と略とが互いに入り合つて全体をひとすじにまとめるのに「法」という名称もち

いる。菩薩が仮に広と略とが互いに入り合うことを知らなければ、自らを利し他を利することはできない。

【解説】

第一義諦であり姿を有さない一法句を略とし、具体的な姿を有する二十九種の莊嚴を広と表して、広と略との互いに相入ることを説く。そして、二種法身として、法性法身（第一義諦・一法句）と方便法身（二十九種莊嚴）とをあげて、二者の広略相入を示す。

『無量壽經論註』巻下

【本文】

一法句者謂清淨句清淨句者謂真實智慧無為法身故此三句展轉相入依何義名之為法以清淨故依何義名為清淨以真實智慧無為法身故真實智慧者実相智慧也実相無相故真智無知也無為法身者法性身也法性寂滅故法身無相也無相故能無不相是故相好莊嚴即法身也無知故能無不知是故一切種智即真實智慧也以真實而目智慧明智非作非非作也以無為而標法身明法身非色非非色也非于非者豈非非之能是乎蓋無非之曰是也自是無待復非是也非是非非百非之所不喻是故言清淨句清淨句者謂真實智慧無為法身也¹⁸⁾

【現代語訳】

真理を表す章句というのは、汚れなく清らかな章句である。汚れなく清らかな章句とというのは、最高の真理を見極める認識力・宇宙にあまねく満ちる絶対の真理そのものである仏の身であるからである。この三句は、交互に相い入る。どのような道理によってこれを真理と言うのか。汚れなく清らかであるからである。どのような道理によってこれを汚れなく清らかと言うのか。最高の真理を見極める認識力・宇宙にあまねく満ちる絶対の真理そのものである仏の身であるからである。最高の真理を見極める認識力とは真実のすがたを見極める認識力である。真実のすがたは形をもたない

から真実の智慧は知ることができない。宇宙にあまねく満ちる絶対の真理そのものである仏の身とはすがたの美しいものと阿弥陀仏である。諸の存在の真実なる本性は、寂靜に歸して一切の形を離れているという理由で、真実そのものの身体は形をもたない。形をもたないから形にならないことができる。このような訳で佛の身体に具わっている微妙すがたに厳かに飾られた模様はとりもおさず真実そのものの身体である。知ることがないから、知らないことがないことが可能である。このような理由であらゆるものの個別性を知りきわめる智慧はとりもおさずあるがままの真如の智慧である。あるがままの真如をもちいて智慧と見なすことは智慧のなすのでなく、なさないのでもないとを表すのである。色も形もなく宇宙にあまねく満ちる絶対の真理そのものをもちいて法身を表することは、法身の物質ではなく物質でないのでは無いことを表すのである。否定を否定すれば、どうして否定を否定することが肯定であると言えることができようか。いやできない。おもうに否定を無にする、これを肯定というのである。自らを肯定して他に依存できないこともまた肯定ではないのである。肯定でなく否定でなく、固定した見解を打ち破るために、否定をどこまでも重ねていくことでも諭えられないところである。このような訳で汚れなく清らかな章句と言う。汚れなく清らかな章句とは最高の真理を見極める認識力・宇宙にあまねく満ちる絶対の真理そのものである仏の身であると言うのである。

【解説】

まさに『釋淨土群疑論』にも用いられている即非の論理によって、「真智は無知」「無相なるが故に能く相ならざることなし」「相好莊嚴は即ち法身なり」「無知なるが故に能く知らざることなし」「智慧の作に非ず、非作に非ざること」「法身の色に非ず非色に非ざること」などの言い回しによって、百非の否定だけにとどまらない真理を清淨句という肯定的な表現によって表している。つまり、極樂淨土の清淨なる具体的な相を有する莊嚴が、そのまま、第一義諦であり相を

有することのない真実無為法身であると導いている。

以上、『釋淨土群疑論』において、第一義諦と世俗諦との調和を説いているところの淨土教の哲学的原理の原点を『無量壽經論註』の中に見いだすことができる。『大乘法苑義林章』において、窺基が展開した指方立相批判は、懐感の第一義諦と世俗諦との調和という論法に於いて反駁し、その背景にある論理は、曇鸞の『無量壽經論註』に展開されたものであったことが明らかとなった。

註

- (1) 『釋淨土群疑論の研究』一八八頁
- (2) 『大正藏經』五一卷一〇六頁a
- (3) 安永九年三月校正改点洛陽書林開版十一丁〜十三丁
- (4) 古人とは雲鸞、道悼、善導、などの淨土教の諸師を指すものと考えられる。
- (5) 『大般若波羅蜜多經卷』玄奘訳 『大正藏經』五卷 内外空は随所に説かれている。
外空。内外空。空空。大空。勝義空。有為空。無為空。畢竟空。無際空。散空。無變異空。本性空。自相空。共相空。一切法空。不可得空。無性空。自性空。無性自性空。
- (6) 『維摩詰所說經』『大正藏經』一四卷五四四頁b c 維摩詰言。諸佛國土亦復皆空。又問。以何爲空。答曰。以空空。
- (7) 『維摩詰所說經』觀衆生品第七 『大正藏經』一四卷五四七頁a
維摩詰言。譬如幻師見所幻人。菩薩觀衆生爲若此。如智者見水中月。如鏡中見其面像。如熱時焰。如呼聲響。如空中雲。如水聚沫。如水上泡。如芭蕉堅。如電久住。如第五大。如第六陰。如第七情。如十三人。如十九界。
- (8) 『妙法蓮華經』方便品第二
『諸法從本來 常自寂滅相 佛子行道已 來世得作佛』（參照）岩波文庫『法華經』 岩本裕訳（梵文和訳）『この世に存在するものはすべて最初から常に平安で、静かである。修行を完了した仏の息子は未来において仏になるであろう』『大正藏經』九卷

八頁b 諸法從本來常自寂滅相 佛子行道已來世得作佛

〔金剛般若波羅蜜經〕 『大正藏經』八卷七五四頁a

莊嚴佛土者則非莊嚴。是名莊嚴佛土。

〔大正藏經』八卷七四九頁a

如是滅度無量無數無邊衆生。實無衆生得滅度者。何以故。須菩提。若菩薩有我相人相衆生相壽者相。即非菩薩

〔大正藏經』八卷七五三頁a

如是滅度無量無數無邊衆生。實無衆生得滅度者。何以故。須菩提。若菩薩有衆生相即非菩薩。何以故。非須菩提。若菩薩起衆生相

人相壽者相。則不名菩薩

○〔金剛般若經〕に見られる「即非の論理」批判 立川武蔵 『印度學佛教學研究』第四一卷第二號平成五年三月

「Aは非Aである」とは、「Aとして存在するものであると考えられているものは、実際には非存在なるものである」ということを意味し、「AはA以外のものである」を意味しない。このように考えるならば、『金剛般若經』に特殊な論理が存在すると考える必要はまったくない。

〔觀無量壽經』『淨土宗全書』一卷三八頁

唯願世尊。爲我廣說無憂惱處。我當往生。不樂閻浮提濁惡世也。此濁惡處。地獄餓鬼畜生盈滿。多不善聚。願我未來不聞惡聲。不見惡人。今向世尊五體投地。求哀懺悔。唯願佛日教我觀於清淨業處。爾時世尊放眉間光。其光金色。遍照十方無量世界。還住佛頂。化爲金臺如須彌山。十方諸佛淨妙國土。皆於中現。或有國土七寶合成。復有國土純是蓮花。復有國土如自在天宮。復有國土如頗梨鏡。十方國土皆於中現。有如是等無量諸佛國土嚴顯可觀。令韋提希見。時韋提希白佛言。世尊。是諸佛土。雖復清淨皆有光明。我今樂生極樂世界阿彌陀佛所。唯願世尊。教我思惟教我正受。

〔大乘大集地藏十輪經』玄奘訳では、一闡提と云う述語は使われず「斷滅善根」「斷善根」などを使用している。

〔大乘大集地藏十輪經』四卷『大正藏經』十三卷七四二頁a

此於一切過去未來現在諸佛。犯諸大罪。決定當趣無間地獄。斷滅善根焚燒相續。一切智者之所遠離。彼既造作如是重罪復懷傲慢誑惑世間。自稱我等亦求無上正等菩提。我是大乘當得作佛。譬如有人自挑其目盲無所見。而欲導他登上大山。終無是處。於未來世有利帝利旃荼羅王宰官居士長者沙門婆羅門等旃荼羅人。亦復如是。於歸我法而出家者若是法器若非法器諸弟子所惱亂呵

罵或以鞭杖楚撻其身或閉牢獄乃至斷命。此於一切過去未來現在諸佛犯諸大罪。斷滅善根焚燒相續。一切智者之所遠離。決定當趣無間地獄。彼既造作如是重罪。復懷傲慢誑惑世間。自稱我等亦求無上正等菩提。我是大乘當得作佛。彼由惱亂出家人故。下賤人身尚難可得。況當能證二乘菩提。無上乘於其絕分。

『大乘大集地藏十輪經』五卷『大正藏經』十三卷七五〇頁c

師及弟子俱斷善根。乃至當墮無間地獄。善男子。如人死尸臙脹爛臭。諸來見者皆為臭熏。隨所觸近爛臭死尸。或與交翫隨被臭穢之所熏染。如是真善刹帝利王乃至真善戍達羅等若男若女。隨所親近破戒惡行非法器備。或與交遊或共住止或同事業。隨被惡見臭穢熏染。如是如是。令彼真善刹帝利王乃至真善戍達羅等若男若女退失淨信戒聞捨慧成旃荼羅師及弟子俱斷善根。乃至當墮無間地獄。

(12) 『維摩詰所說經』十四卷五三七頁B

法王法力超群生

能善分別諸法相

已於諸法得自在

說法不有亦不無

以因緣故諸法生

諸法不有亦不無

以因緣故諸法生

諸法不有亦不無

以因緣故諸法生

諸法不有亦不無

以因緣故諸法生

諸法不有亦不無

以因緣故諸法生

諸法不有亦不無

以因緣故諸法生

(16) 『無量壽經論註』卷下『淨土宗全書』一卷二四四頁b二四四五頁a

(17) 『無量壽經論註』 卷下 『浄土宗全書』 一巻二五〇頁 a—b

(18) 『無量壽經論註』 卷下 『浄土宗全書』 一巻二五〇頁 b

キーワード 群疑論、論註、第一義諦、俗諦

(むらかみ しんずい 共生文化研究所 研究員)